

論文要旨 本研究の目的は、日米の言語聴覚士（以下、ST）教育の違いが、どういった実務教育効果・実務能力の差として出てくるのか、ヒューマンエラーの内容を解明し、どのような教育内容を積ませるべきかを考察することである。

研究方法はインタビューであり、対象回答者は地方都市中小病院勤務の ST 6 名であった。

研究プロセスは（1）先行文献の調査（2）日米の ST 実務教育の差の調査（3）洞察問題解決の視点から ST 教育を考察（4）日本の実務教育・実務実態を調査するためのインタビューの実施である。

ST の質の向上や経験年数によって評価に差があるといった先行文献はあったが、学術的な解決方法や ST の実務教育のメカニズムの研究には至っていない。日米の ST 実務教育の差は、米国では大学院での臨床実習以外に、Clinical Fellowship の実施、「問題解決型学習」や「根拠に基づく臨床」での授業の受講、他の医療職の学生などとカンファレンスに参加などより臨床に沿ったプログラムを大学院で受講できることである。これらのプログラムの違いを洞察問題解決の視点から考察したところ、米国の教育では、洞察問題解決が使われていることが分かった。

質的分析では（1）ST に必要なスキルディメンションを明確化し、（2）志・価値観、知識、経験、技術と洞察問題解決との関係性のメカニズムを解明した。スキルディメンションは大きく 9 個のスキル（詳細に区分すると 26 個）が ST には必要であることが分かった。

志・価値観、知識、経験、技術については、洞察問題解決によって後輩の業務上の困難な点が解決される。知識・経験の応用にもつながり、技術（スキル）から業務（行動）となる。これが、ST のパフォーマンスを上げ、ヒューマンエラーを防止する流れだと考えた。また、流れの中で、洞察問題解決とその応用が付け加わることにより、より高いレベルの技術ともなり、ヒューマンエラー防止につながるという仕組みだと考える。

これらの結果により、ヒューマンエラーをなくすには、より多くの洞察問題解決が使われることが必要であると分かった。本研究は、知識、経験、技術に至る中で、洞察問題解決をしていくことが、ヒューマンエラーを防止することに繋がる可能性を示唆している。

キーワード：言語聴覚士、言語聴覚療法、洞察問題解決、ヒューマンエラー、実務教育
Key Words: Speech therapist, speech language hearing therapy, insight problem-solving, human error, practical education